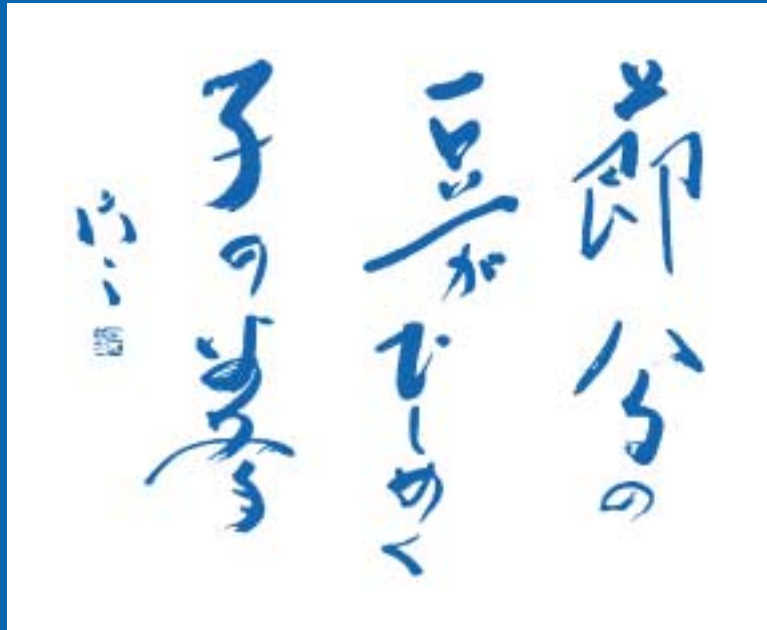


HAIKU KAKAN

花冠

ホームページ <http://kakan.info/>



2月

通巻338号

花冠 (Kakan) 平成二十四年二月一日発行(毎月一日発行) 第三十巻第二号(通巻三百三十八号) 定価五〇〇円

月間最優秀

高橋正子選評

八月賞

★見ゆるものみな新涼の影を持つ
秋に入ると、目に映るものが新鮮に捉えられる。見えるものの影にも夏とは違った新しい涼しさが加わる。 多田有花

★畦草を刈りて定かや稲の花

畦草の花が咲くころは、畦草も伸びてくる。それを刈ると畦がさっぱりとして、稲の花の存在が定かになる。取り合わせの句ではないので、稲の花が生き生きとしている。 小口泰興

★山々を吹きわたりゆく盆の風

広く遠く山々を越えて吹きわたる盆の風に、はるかな魂を思い、ここにある命を思う心が、深く深く詠まれている。 河野啓一

九月賞

★セロファンを鳴らし秋の薔薇解く
秋の薔薇のくつきりとした色をさらに引き立てる透明なセロファン。「セロファンを鳴らし」で、薔薇の色にセロファンの鳴る軽い音が加わり、立体感のある句となっている。薔薇を解く美しい仕草が見える。 藤田洋子

★風音の明るき朝よ稲刈らる

稲が熟れて、刈られるころは、稲の熟れ色に染まるかのようになり、明るい爽涼の風が吹く。コンバインが刈り進むにしろ、鎌でサクサク刈るにしろ、稲を刈る季節は、軽やかで、明るい。 後藤あゆみ

毎月25日発売
定価900円(税込)

月刊 俳句界 2012年2月号

特集

俳句スピリット

人生の苦境を俳人はどう詠んだか!?

- 〈獄中〉秋元不死男 齋藤慎爾
- 〈ハンセン病〉村越化石 林桂
- 〈恋愛〉鈴木真砂女 西村和子
- 〈介護〉木田千女 木田千女
- 〈ホームレス〉大石太 関悦史
- 〈震災〉永田耕衣 鳴戸奈菜
- 〈白血病〉住宅顕信 住宅春樹
- 〈雇用格差〉柴田千晶 柴田千晶

特別作品

宇咲冬男 古賀しづれ

カラグラフィ 俳句界NOW 松浦加古

口語俳句にチャレンジ!

○今こそ現代の口語俳句を! 甲陽
○口語で俳句を読む 三宅やよい 種田スガル他

俳句の事件簿

第二芸術論の衝撃

▽第二芸術とは▽第二芸術と賛否両論
▽現代俳句は第二芸術論を克服したか?
前田吐実男 仙田洋子他

【異色の女流】秦夕美 インタビュー他

私の一冊……林十九楼

※セレクション結社※「浮野」

魅惑の俳人 白田亜浪

対談 ゲスト 佐高信の甘口でコンニチハ!
城之内早苗 (演歌歌手)

株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

二月号 目次

冬晴抄……………1

近江長浜……………高橋 信之…2

湖水に向着て……………高橋 正子…3

作品七句①……………4

 多田有花・藤田洋子・桑本栄太郎・柳原美知子・小西宏

 黒谷光子・藤田裕子・祝恵子・高橋秀之・川名ますみ

 安藤智久・高橋句美子

花冠俳句フェスティバル報告…高橋正子・高橋秀之…10

イギリス俳句の旅(二)……………高橋 正子…14

湯豆腐……………平田 弘…15

作品七句②……………16

 古田敬二・佃康水・河野啓一・川本良子・下地鉄・小川和子

 後藤あゆみ・井上治代・小口泰興・上島祥子・堀川喜代子

 迫田和代・津本けい・渋谷洋介・足立弘

子どもの俳句……………18

選後に……………高橋 正子…19

俳句の風景(十一)……………20

 題字・表紙俳句(節分の豆が
 ひしめく子の拳)……………高橋 信之

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

子規が取り上げ、印象明瞭を好む句の一例としたので、碧梧桐の代表句となった。明治二十九年の作。碧梧桐二十四歳であった。

(高橋信之)

後記

★二月号をお届けします。今月号は、第二十九回花冠フェスティバルの報告記があります。第二十九回も大会を重ねたわけです。前日の琵琶湖畔の長浜吟行はとて心に残るものでした。ご参加の皆さんそれぞれのご報告をお読みください。

★花冠創刊の九月に誕生した娘の句美子も信之先生と私に同行して、世話をしてくれましたので、ずぶん助けられました。花冠もあしかけ二十九年の歳月が経ちました。その間、インターネットが一般に普及して、それを俳句ではどこよりも早く取り入れ、花冠を継続してきました。無事二十九回の花冠フェスを終えることができ、肩の荷が下りた感じでご支援ご協力ありがとうございました。

★立春を過ぎると日脚も次第に伸びて、冬至のころに比べると日がずいぶん明るくなってきます。これが、春が来たまらずはのあかしだと思つと嬉しくなります。寒いけれど外に出てみるのもよいと思います。慣れると心地よい寒さというものもあります。数年前に、椿が咲き始めた鎌倉の竹の寺として有名な報国寺に行つたことがあります。凍てつく二千本の竹林を見ながらお抹茶をいただきました。非常に寒かつたわけですが、もう一度あの寒

さを体験してみようという気になっています。寒い時は寒いように。でも、それはともかく、風邪をひかれませぬように。(正子)

★日経、昨年十二月六日朝刊の「私の履歴書」に歌舞伎の松本幸四郎が先代幸四郎の父を語つて、「弟子は師匠の悪いところを真似て、いいところをとらない。自分で覚えろ」と私にあまり教えなかつた、と書いています。同じ日の夕刊では、「このころの玉手箱」に興福寺の多川俊映貫首が弘法大師の名句「真言は不思議なり 観誦すれば無明を除く」を取り上げ、「真言つまり真理の言葉は、本質を洞察したもの。だから、とりあえずの意味など考えず唱えなさい。そうすれば無明すなわち煩惱は除かれてゆく。」と述べ、「寡黙な父も同じことを教えてくれたのだと後年、気が付いた。」と書いています。

★俳句は、日本の伝統文化なので、その本質では、歌舞伎や日本の仏教と同じだと思つてよいでしょう。俳句では、自然の本質を読むことが重要ですが、大空などの自然の本質を読むには、「とりあえずの意味など考えず」に、戸外に出て、それらと対面し、それらをただ見ることです。「弟子は師匠の悪いところを真似て、いいところをとらない。」ので、ひたすら自然と対面し、自然の本質を読みとることです。これには、長年の修行が必要となりま

(信之)

御案内

☆月例会
第二日曜日。
詳細は後日ご案内いたします。
☆月例ネット句会・ブログ句会
詳細はホームページをご覧ください。
☆花冠作品投句
毎月十日締切・雑詠十句以内
☆投句・送金は花冠発行所へ

花冠第三十巻第二号(通巻第三三八号)

平成二十四年一月二十日印刷
平成二十四年二月一日発行
創刊者 高橋 信之
編集発行人 高橋 正子
印刷人 帆谷 一江
発行所 花冠発行所
〒二三一〇六二
横浜市港北区日吉本町三丁目四〇一四一〇五
電話 〇五〇一三六四一八八二七

印刷所 有限会社 龍華堂
電話 〇八九九二四一四六六六
定価 五〇〇円
同人費 三万円
(誌代・ネット使用料・諸雑費を含む)

冬晴れて

藤田 洋子

丘登る落葉いろいろ踏み鳴らし
波の^{大阪へ}上群れて明石へ冬鷗
城灯り冬静かなる大阪よ
冬晴れて視線を高く天守へと
外濠の長さを桜紅葉かな
冬うらら人みな城へ向き歩く
葱刻む旅の一と日のはや遠く

山茶花

多田 有花

播磨灘沖のみ光る冬隣
きつぱりと冬を迎えし心持ち
山茶花の長き季節の始まりぬ
スキー場近づく雪を待っており
落葉踏み山を巡りて戻りけり
手打ち蕎麦食べて時雨の中へ出る
別れてのち冬の夕陽を見て帰る

湖水に向きて

高橋 正子

ひつじ田の明るいまどりを疾走す
トンネルを抜けて手帖に差す冬日
十一月のはだらな雪の富士が右
平らかな湖水に向きて冬はじめ
^{湖北四句}
波音の湖に生まるる冬はじめ
胸までの波に浮かびて湖の鴨
梅檀の実の散らばりに湖晴るる
冬が^{大阪城天守二句}すみ生駒の山の青透かし
六甲も金剛山も冬がすみ
柿の^{新幹線}葉ずし車中の冬灯に広げたり

酢 茎 買 う

桑本栄太郎

木の実降るそのひと時に出会いけり
南座のまねき上がりて酢茎買う
懸俳句フエスタ・大阪城吟行二句崖の冬の小菊や大手門
階を登り眼下に冬紅葉
想い出の峡の吉野や冬銀河
満天星の真紅となりぬ朝時雨
落葉踏む紅も黄色もさみどりも

新 築

柳原美知子

柿落葉水のながれを鮮やかに
残菊を仏に活けて留守にする
田園新築に冬灯ともして我が家なる
山紅葉朝日ひろがりゆく窓に
時雨きてウツドデッキを濡らしゆく
白菜をたっぷり入れてつみれ汁
病院の黄落の中へバス停まる

雪 吊

小西 宏

三日月の澄みたる空の深さかな
焼き栗の風の香かんばしシャンゼリゼ
冬薔薇の白きに仰ぐ観覧車
木枯や房総と富士一望に
雪吊の天の青さに絞られる
句会へと急ぐ車窓に冬の虹
水鳥の湖おおらかに空の下

鴨 発 ち て

黒谷 光子

露光る朝の畑に供花を切る
晩秋の野を貨車の音高々と
落葉踏み足裏よろこぶ音を聞く
大根引く土をせり出す白まぶし
夜は音を立てて湖北の時雨かな
冬の虹夕暮れ近き湖の街
鴨発ちて湖の一湾がらんだう

冬 野

川名ますみ

買物の母ポケットにどんぐりを
枕辺にどんぐり今朝は割れて在り
水鳥の来て多摩川の和らぎぬ
ビルも木も冬野に影を伸ばしけり
祖母訪うて冬の多摩川のぼる道
おそろいのトレーナー過ぎ冬の土手
川下る冬夕焼がその先に

冬 帽 子

高橋 秀之

冬紅葉向こうに大きな空がある
冬紅葉紅に黄色に薄緑
冬日和波止場の先から響く声
大皿に炒め大根の葉が溢れ
湯気の中葱いっぱいのお味噌汁
兄弟の喧嘩も終わり蜜柑食う
夜が明けて筆筒の奥から冬帽子

近江平野

祝 恵子

両の手に余る園児等甘藷引く
ポケットに紙と鉛筆冬はじめ
花八手溝より先は森となる
つわの花急坂上れば空広し
湖の鴨岩に休める一羽あり
冬うららら岸辺に鳥の寄り遊ぶ
冬空にバルーンの浮いて近江平野

冬に入る

藤田 裕子

ラジオより訛りし民話冬に入る
木星も星座もしかと冴ゆる夜半
花八手みな咲ききりし裏庭を
オルゴールおさな児聞き入る炬燵部屋
湯豆腐に茗荷を赤くはんなりと
回覧板山茶花咲く道お隣りへ
風に舞う落葉の軽き色模様

山葵取り 安藤 智久

冬帽子目深に父との山葵取り
ラスク工場甘く香りて十二月
復元の駅舎のドーム冬天に
ベビーカーの児らの眼差し冬うらら
湯に低く父の鼻歌冬浅し
冬晴れの海の輝きしらす漁
物産展に林檎の積まれ香りけり

白い風車 高橋句美子

秋の電車大地をかける一直線
白い風車秋晴れの空青々と
マフラーをやわらかく巻き陽が眩し
朝冷える皆集まりて城登る
天守閣紅葉流れる一面に
街市場の賑やかな声秋空へ
甘い香り林檎のタルトを食卓に

花冠俳句フェスティバル二〇一一

in 大阪

十一月二十六日 近江長浜・琵琶湖吟行
十一月二十七日 大阪俳句大会開催

花冠フェスを終えて 高橋正子

二日間にわたる大阪での花冠フェスティバルには、遠路はるばるお越しいただいた方、また、地元関西の方がた、フェスティバルにご参加いただき、盛会に終わりましたことをお礼申し上げます。お土産や、お祝いなど、お気遣いいただき、ありがとうございます。おかげさまで、お天気にも恵まれ、おいしいお料理もいただき、たのしい実りある会となりました。インターネット俳句センター開設日の十一月二十七日と重なり、また開設十五周年の節目となつて、意義深いフェスティバルになりました。新たな気持ちで、スタートしたいと思います。

大阪での花冠フェスは、以前計画していて、事情でとりやめになつたいきさつがあるので、今回は、ぜひ大阪で開催したいと思っております。それが実現し大変嬉しく思いました。今年の花冠フェスは、「インターネット俳句センター」の開設以来のアクセスが八月二十四日に百万回に達したので、その記念フェスともなりました。大阪で開催ということで、地元の高橋秀之さんに、また前日の琵琶湖吟行では、湖北にお住いの黒谷光子さんにお世話になりました。ありがとうございます。

私たち、信之先生、句美子さん、私は、新横浜から新幹線で米原までゆき、長浜でみなさんと顔を合わせました。昨日は時雨だったという湖北も二十六日にはよく晴れて絶好の吟行日和でした。久しぶりの方々、初めての佃康水さん、秀之さんのお

子さん三人ともお会いできました。長浜駅からすぐの豊公園に着くとすぐ、全国子ども俳句協会の「第一回子ども俳句賞」の授賞式を行いました。

私は念願の琵琶湖を岸辺から初めて眺めて、大変感銘を受けました。歴史ある長浜城や、豊公園の松の雪吊りも印象に残りました。琵琶湖畔の長浜ロイヤルホテルでの昼食のハヤシライスも熱々でおいしくいただきました。昼食後は豊公園で、小西宏さんと多田有花さんの司会で琵琶湖を眺めながら野外句会を行いました。吟行ならではの楽しい句会方式です。「雪吊の天の青さに絞られる」の小西宏さんの名句も生まれました。

夕食は、宿泊する七人でホテルの食堂で、先付けから始まる関西料理を楽しみました。夕食後は、松山からバスで来られた藤田洋子さんを交え和室での恒例の句会となりました。この句会がもつとも充実した句会となるのが例年です。日に何度か句会を重ね、句を搾り出し、体も疲れてしまうほどやって、やつとその人本来の句が生まれると言う感じでした。以前は学生たちと俳句合宿といつて、そのようなことをよく行いました。やはり、ネット上だけでは、本物のは生まれなと言いつつよいと思いました。伝統文化の難しさの一面でしょう。

大会当日は、朝の大阪城吟行に始まり、花冠各賞の授賞式では、賞状と俳句を書いた扇子をお渡ししました。男性には信之先生の句の扇子を、女性には拙句の扇子です。

横浜の自宅に戻って十二月六日の「日経」を読みましたが、そこに載っていた先代松本幸四郎と弘法大師の言葉に目を覚まされた思いがしましたので引用します。

日経十二月六日の朝刊「私の履歴書」では松本幸四郎が父の先代幸四郎の言葉を語っていました。

父は常に言っていた。「弟子は師匠の悪いところを真似て、いいところをとらない。自分で覚える」と私にあまり教えなかつた。芸の伝承の難しさを実感させる言葉である。

日経十二月六日の夕刊「こころの玉手箱」では興福寺の多川俊映貫首が弘法大師の言葉を用いています。

「真言は不思議なり 観誦すれば無明を除く」真言つまり真理の言葉は、本質を洞察したものだから、とりあえずの意味など考えず唱えなさい。そうすれば無明すなわち煩惱は除かれてゆく。理屈っぽい私に温厚な和上がくださった、弘法大師の名句だ。寡黙な父も同じことを教えてくれたのだと後年、気が付いた。

偶然にも同じ日に内容の同じような記事が掲載され、松本幸四郎の父の言葉には、とくに感じ入りました。花冠の選者を務めるものとして、心したい言葉です。 (花冠代表)

吟行・大会報告 高橋秀之

「花冠俳句フェスティバル二〇一一 in 大阪」は、横浜から高橋信之先生、高橋正子先生をお迎えして、十一月二十六日(土)から二十七日(日)の二日間にかけて開催されました。初日は北近江・長浜吟行と昼食会、句会、二日目は大阪で大阪城吟行と各賞授賞式、記念句会、記念講演などがありました。

一日目

一日目は午前十一時十五分にJR北陸線の長浜駅集合です。最近、週末の雨の確率の高かった関西地方でしたが、この日はそれが嘘のような冬晴れの陽気でした。私(高橋秀之)は、特別参加の三人の息子たちと一緒に東海道本線から長浜方面に直接乗り入れるJRの新快速電車に乗っていたところ、米原駅から乗ってこられた高橋信之、正子両先生や句美子さん、佃康水さんと同じ車両のすぐ隣の座席に乗合わすという、偶然というか、巡り合わせのご縁からスタートいたしました。

長浜駅改札口で今回の参加者のみなさん(小西宏さん、黒谷

は薄曇の天候です。午前九時、各賞授賞式や記念句会の会場であるホテルプリムローズ大阪のロビーに午前九時に集合。信之、正子両先生に昨日から引き続き参加の宏さん、有花さん、恵子さん、康水さん、句美子さん、昨日の夜に合流された藤田洋子さん、本日の吟行から参加の桑本栄太郎さん、津本けいさん、それに私(秀之)の十一名で大阪城へ向かいます。ホテルから大阪城公園までは、大阪府警本部の横を歩いて約五分。そこからお城までは十五分ほど歩きます。みんなで天守閣にあり、大阪の風景を展望してきました。河野啓一さんと付き添いの具子さんご夫妻は十時三十分ごろに合流し、今日の記念句会の投句、選句を済ませます。

正午からプリムローズ大阪三階高砂(東)の間で、各賞授賞式が行われました。今回の受賞者は、第二十九回花冠賞が小西宏さん、桑本栄太郎さん、佃康水さんの三名。第十三回橘俳句賞が多田有花さん、有花さんは新人賞、花冠賞(旧水煙賞を含む)とあわせ、初めての三賞受賞者だそうです。第十八回花冠新人賞が津本けいさん、第三回高橋信之賞が藤田洋子さん、第一回インターネット俳句センター賞が祝恵子さんでした。ご受賞されました皆様方、おめでとございました。

その後、昼食をとりながら信之先生の記念講演がありました。先生からは今日がインターネット俳句センター開設十五周年の記念日であることの紹介があり、十五年前(一九九六年)にどうしてインターネットを使った俳句の場を作られたのか、そして、十年先を見越して、想定して行うことが大切であること、インターネットで仲間が大事な座の文学ができるのか、感性の共同体ができるのかといったことなどいろいろとあったが、今年の十一月にg o o のブログがフェイスブックと連携ができるようになったことで枠組みができたと考えられることなどについて、お話がありました。

さらに、先生が成城大学の論文で書かれた「インターネット

光子さん、多田有花さん、祝恵子さん、上島祥子さん)とも落ち合って、全員で「豊公園」へ向かいます。その豊公園内でこども俳句の授賞式を行いました。

今日の受賞者は、高橋成哉・博己・周也、上島光太郎・千晴祝・桃果・龍之介の七人。まずは本日本人が参加している高橋成哉くんから。少し照れながらも嬉しそうな表情で高橋信之先生から賞状をもらいました。次に博己くん。ものすごく嬉しそうな笑顔でした。三番目は周也くん。分かっているのかわからないのか、少しはにかんでいました。上島光太郎くん、千晴ちゃんも祥子さんが、祝桃果ちゃん、龍之介くんは恵子さんがそれぞれ代理で賞状を授与されました。

授賞式の後には黒谷光子さんのご案内で長浜城前を歩いて琵琶湖岸へ。この日の琵琶湖は、鮮やかな青空の下、穏やかな波に鴨がたくさん浮いてのんびりしていました。正子先生をはじめ琵琶湖を初めて目にされる方もあり、ここで約三十分、みなさん思い思いに吟行を楽しみました。

昼食は光子さんのお世話で、長浜ロイヤルホテルのレストランでハヤシライス。同人会長になられた宏さんの乾杯のあと歓談のひとつと、今日の長浜吟行の最優秀句の発表があり、大会などの場では初めての受賞という宏さんの「雪吊」の句が選ばれました。

昼食後は午後二時から三時まで一時間。湖畔の緑地のベンチで句会です。参加者全員の句のコメントや作者の思いなどを語り合い、信之先生、正子先生からは、いろいろと楽しい句評、様々なご指導をいただきました。今回は、屋外での句会でしたが、自然の空気に触れる中での句会も室内とは違った趣がありました。これで一日目の長浜吟行の行事は終わりました。

二日目

二日目は大阪で、大阪城吟行からスタートです。今日の大阪

と文学」を題材に、お話がありました。その中で「人間らしさ」といえば、ゲートが『ファウスト』の終末近くで述べているところの

Auf freiem Grund mit freiem Volke stehen.

(自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい。(鵑外記))ということ、トーマス・マンが、長編小説『ファウスト博士』のなかで『第九交響曲』をいっている、

Das Gute und Edle was man das Menschliche nennt, obwohl es gut und edel.

善であり高貴であるもの、善であり高貴だが、人間らしいものといわれるものが求められていることを特に強調されました。

そして、最後に先生の言葉で「人の喜ぶのをみて喜ぶのがいい」「インターネットでみんなが楽しんで喜ぶのがいい」「来年は横浜で大会を開催しようと思うが、そのときも誰かの喜ぶ顔を見て喜ぶのがいい」との話で締めくくられました。これに対しては栄太郎さんの共感のコメントがあり、参加者全員の拍手で先生に感謝の気持ちを伝えました。

引き続き、記念句会に移ります。事前に済ませた投句、選句を、宏さん、有花さんの名コンビ(迷コンビ?)の司会で句会が進みます。昨日の長浜吟行と同様、楽しさの中にも両先生からの様々な指導もあり、例えば、「五感を活かして句を詠むことの大切さ」や「心は言葉で表せない。だから正確な言葉を使うことが大切であること」「先生の意見を自分で考え、自分で直すことの大切さ」など、参加者の皆さんはとても勉強になったことでしょう。だからこそ「句会はいいな」という句会の大切さを、改めてみんなで共有したところです。最後に、両先生から記念句会の最優秀句が発表され、宏さん、洋子さんの句が選ばれました。そして、午後三時、まだまだ名残の尽きない中、今回の全日程を終えました。

最後に

長浜吟行のお世話をいただきました光子さん、両日とも司会を務めていただいた宏さん、有花さん、細々としたお仕事を引き受けてくださった句美子さんをはじめ、ご参加いただきました皆様、ありがとうございました。また、両先生を始め、遠くからご参加いただいた皆様お疲れ様でした。今回ご参加いただきました皆様も、残念ながら今回は不参加でした皆様も、また次回、お会いできることを楽しみにしております。

信之先生の論文はこちらにあります。

<http://kakan.info/nobuyuki/02/haiku3.pdf>

花冠俳句フェス作品集

花冠フェス最優秀四句 信之・正子選

○第一回句会最優秀（長浜・豊公園）

雪吊の天の青さに絞られる 小西 宏

表現に無駄がなくイメージが鮮明である。琵琶湖畔の長浜の公園の松にかけられた雪吊。雪吊の縄が青空の中に、先端で括り絞られている。「天の青さ」が、堂々として、雪吊の凜とした様子がよく見える。

○第二回句会最優秀（ホテル「プリムローズ大阪」和室）

快晴が包みし冬の奥琵琶湖 多田有花

広い琵琶湖の奥である湖北は、その日快晴であった。時雨の多い湖北が快晴に包まれることは希かもしれない。「奥」という方言と、「包む」という表現がよく呼応して、湖北の感じがよく出ている。

○第三回句会最優秀二句（ホテル「プリムローズ大阪」会議室）

イギリス俳句の旅（二）

高橋 正子

第六日 九月二十四日

今日は、今回のイギリス旅行の最後の観光となる。明日、ロンドンヒースロー空港発の便で帰国の予定。

今日の予定は、ヒースローのホテル（ホリデイインロンドンヒースローM4JCT4）を午前八時十五分に出発。午前がロンドン市内観光。午後は自由行動。

ロンドン

ロンドンの観光名所はすでにたくさん写真で日本でもみんなに知られている。国会議事堂の時計ビッグ・ベン、ロンドン塔、タワーブリッジ、ロンドン橋（なんの変哲もない橋）、ウェストミンスター寺院、セント・ポール大聖堂、バッキンガム宮殿をバスの窓から。バッキンガム宮殿は降りて写真を撮ったりした。それからテムズ川の水。昼食は、イギリスの代表的な料理フィッシュアンドチップスを食べたが、これはフリーメイソンの建物の近くにある。「フリーメイソン」と聞くと、不思議な気分になる。昼食後、ロンドン三越で四十分ほど買い物。その後自由行動。キューガーデンに行くことにした。三越があるところは、ピカデリーサーカス。このピカデリーサーカスから、地下鉄（チューブと愛称されるが）でキューガーデンまで行く。ロンドン市内から三、四十分。ピカデリー線のハンマースミス

冬晴れて視線を高く天守へと 藤田洋子
大阪城の吟行での作。大阪城は、巨大な石垣とそびえる天守に目が注がれる。足元よりも、視線は冬晴れの空へ、天守へと自然に向けられる。いわゆる切れのない「一句一章」の句のよさがあって、すっきりと、素直な感覚でよくまとめられている。

句会へと急ぐ車窓に冬の虹 小西 宏
(高橋正子)

照り曇り、ときに時雨がぱらつくような天気、つかの間現れた虹。句会へ急ぐ車窓に見た虹に、時雨模様の際の経過と、作者のながしかの思いが読める。

「作品」

明日へ旅立ちの冬天ひろびろ青し 高橋信之

白い風車秋晴れの空高々と 高橋句美子

止まる度車両に満ちる山の冷え 上島祥子

雪吊の天の青さに絞られる 小西 宏

平らかな湖水に向き冬はじめ 高橋正子

快晴が包みし冬の奥琵琶湖 多田有花

比良晴れて鴨の琵琶湖の蒼深し 佃 康水

鴨の群発ちて一湾がらんどろ 黒谷光子

落葉拾い句座へと帰り机上へと 祝 恵子

天守から冬の大阪一望す 高橋秀之

銀杏黄葉揺すりて掠の声しきり 津本けい

冬晴れて視線を高く天守へと 藤田洋子

階を登り眼下や冬紅葉 桑本栄太郎

冬麗のこの日花冠の記念祭 河野啓一

駅まで行き、そこからリッチモンド行きに乗り換え、キューガーデン駅で降り、徒歩十五分ほどで、キューガーデンに着く。駅からほぼ真直ぐな道だ。

二階バス次々来たり秋暑し

キューガーデン

キューガーデンでは、時間があまりないので、まず温室を見学。温度は二十八度Cに設定され、水蒸気をふかしているところもある。アフリカ、オーストラリア、などと分けられその熱帯植物が沢山集められている。いちいち名前を確認して写真をとることもできないので、よいと思つたものを次々に写した。日本で観葉植物として売られているものも多く見かけた。日野草などはアフリカの花である。胡蝶蘭は見事。温室の地下は水生植物や海藻などもあり、魚もいる。これはさすがと驚いた。温室の後は、オニバスを見ようとウオータリーハウスに入ったが、運よく、睡蓮の見どころで、色とりどりの花が咲いていた。黄色、ピンク、紫、白など。日本で見かけるのと違って、花が大きい。茎も水の上に出て、やがて倒れて花が水に浮くようだ。蓮の花があったが、これに注意書きがあり、これは睡蓮ではないのだと書かれてあった。

温室を見たあと、なんとカ伯爵公園、とか薔薇園を見る。もつと奥へゆくと宮殿があるのだが、そこに行く時間はない。薄の類を集めたところが、チカラシバまであった。歩けば、野菊、ほととぎす、日本の楓もある。ガチョウだろうか芝生に飼われて糞に気をつけながら歩いた。芝生には、マーガレットより小さい野菊ほどの白い花が芝に埋もれるように、日本では、蒲公英のように咲いている。見学のあとショップでこの

湯豆腐 平田 弘

風の 一 号 吹く や 冬 支 度
湯 気 の 中 好 み の お で ん 指 を 指 し
湯 豆 腐 の す る り と 溶 け て 香 を 残 し
北 窓 を 塞 ぎ し 風 の 音 唸 り
足 音 の 追 い 越 し て 行 く 師 走 か な
焼 鳥 の 串 啜 え つ つ 褒 め ち ぎ り
焼 芋 の 売 り 声 高 く 風 に 乗 り
冬 め く や 寒 暖 激 し 陽 は 西 に
切 れ 目 な き 冬 の 雨 音 忍 び 寄 る
馬 上 に て 人 参 分 か ち 歩 を 弛 む

作品10句

葱 太 敬 二 引 拔 け

葱 太 し 土 こ ぼ し つ つ 引 き 抜 け
柿 剥 け ば 故 郷 の 山 の 遠 き こ と
お 茶 の 花 金 色 の し べ 濡 れ て お り
ま つ す ぐ に す べ て の 竹 の 冷 え て お り
縁 温 し 茅 葺 の 屋 根 吸 う 冬 陽
大 根 を ぶ ら 下 げ 家 路 向 か い 風
久 女 句 碑 紅 葉 の 中 か ら 山 の 水

梅 檀 の 実 佃 康 水

高 々 と 新 米 積 ま れ 大 廻 廊
火 の 島 や 墓 前 の 菊 に も 火 山 灰
冬 空 に 触 れ て 沖 ゆ く 給 油 船
菰 卷 き の 結 び 目 き り り 百 の 松
夕 映 え の 海 に 寛 ぐ 鴨 の 群 れ
葉 を 落 と し つ つ 梅 檀 の 実 の た わ
長 浜 城 そ び ら に ど ん ぐ り 踏 み 鳴 ら す

ハ 毛 二 力 河 野 啓 一

ク リ ス マ ス 近 し ハ モ ニ カ 吹 い て み る
冬 麗 の こ の 日 花 冠 の 記 念 祭
作 品 を 提 げ 行 く 冬 の 車 椅子
野 に 立 て ば と ん び 高 舞 う 冬 茜
欄 干 に 並 び 潮 見 や 百 合 鷗
満 天 星 は 地 に 楓 は 空 に 冬 紅 葉
冬 霧 の 中 に 生 駒 を 遠 望 す

花を周りにあしらった写真立てを句美子が買った。三越集合が五時四十五分なので、四時半過ぎにキューガーデンを後にした。キューガーデンの駅にも咲きほどの白い小花のイラストが描かれてかわいい駅であった。苗や球根を売っている店も駅前にはいろいろあった。

睡蓮の花いろいろに水を出る
夕食は、三越近くの中華料理。夕食後、ヒースローのホテルへ向かうが、ハロッズがデパートの建物を小さな電飾で飾っていた。添乗員さんも初めて見たとのことである。ハロッズはロンドンシティのはずれにある。シティを出れば一路ヒースローのホテルへと走った。夜は帰宅の準備となつて、カッスル・クームで拾った枥の実を残念ながらゴミ箱へ捨てた。
枥の実を捨てて旅の終わりなり

第七日 九月二十五日

帰国

昨日二十五日(且午後一時四十五分)日本時間午後九時四十五分発のヴァージン・アトランティック航空〇九〇〇便に搭乗し、ロンドン・ヒースロー空港を離陸、帰国の途へ。

日本時間の二十六日午前九時三十分着予定より少し早く成田に着き、午後一前に自宅に帰りました。今年のイングランドの秋は、温かく、傘、レインコートを使うことなく、晴れた日に恵まれました。チェスターではアン王女に、大英博物館ではキヤメロン首相の一家の姿も見ましたので、ラッキーな旅でした。

秋果あふれる 川 本 良 子

若 沖 の や 野 菜 図 カ マ キ リ 首 を 振 る
秋 果 あ ふ れ る セ ザ ン 又 の 絵 の し ず ま り を
漱 石 の 子 規 へ の 手 紙 行 く 秋 ぞ
紅 葉 の ハ ナ ミ ズ キ 通 り 城 晴 天
紅 葉 の 城 下 坊 ち ゃ ん 列 車 汽 笛 高 々
銘 は 翁 竹 の 花 入 れ 紅 い 萩
破 芭 蕉 月 に ふ れ い て 動 き も せ ず

海 の 彼 方 下 地 鉄

晚 秋 の 遠 く 近 く に 波 の 音
水 平 線 の 薄 く な り い く 師 走 か な
ト ポ ロ チ の 花 の 間 の 空 の 青
小 春 日 や 窓 の 形 の 入 日 か な
朝 月 の 海 の 彼 方 の 人 の 住 む
青 芝 に 木 陰 ゆ ら し て 冬 日 和
晚 秋 の 夜 の 深 ま り て 波 の 音

冬 小 川 和 子 河

乾 く 音 う れ し 落 葉 の 嵩 を 踏 む
時 に 実 を 啄 ば み 小 鳥 秋 天 へ
甘 き 香 よ さ く り 林 檜 の パ イ 焼 け る
チ マ ヲ ゴ リ の 少 女 ら に 冬 日 さ ん さ ん と
大 い な る 冬 河 国 境 へ と 流 る
冬 麗 カ サ サ ギ を 水 際 に 追 え ば
雪 舞 う と 添 え ら れ 林 檜 荷 届 き け る

瀬戸内の海見える丘秋夕日
紅葉の葉裏透かして青空へ
冬晴れや携帯の声ついてくる
小雨降るグラウンドゴルフに黄葉降る
ふる吹き吹きの吹きこぼれたり夕餉前
黒土をうず高く盛るねぎ畑
日の落ちて冬の秩父嶺くつきりと

秩父嶺

黒土をうず高く盛るねぎ畑
日の落ちて冬の秩父嶺くつきりと
ふる吹き吹きの吹きこぼれたり夕餉前
小雨降るグラウンドゴルフに黄葉降る
冬晴れや携帯の声ついてくる
紅葉の葉裏透かして青空へ
瀬戸内の海見える丘秋夕日

すすき原

柿すだれ土蔵に影や長屋門
短日や中学校に灯のともる
十二月八日妻は手芸とオカリナへ
梵鐘の余韻は海へと石露の花
冬日差す毘沙門天の黒光り
亡き友とよく似た人やお茶の花
すすき原幼子の声転びをり

雁渡

秋の蝶一葉のようになかなり
海の青空の青超え雁渡る
パラグライダー長く空にあり冬晴る
きらきらと時雨の後の京ひかる
夕暮れを零れつつ句う花終
冬晴れの風力発電よく回る
踏み込んで傾ぐ落葉の深さかな

赤城より鈍行列車里山へ
鶏頭や窓に広がる浅間山
柿すだれ夜風の荒き産土よ
あぜ道の露新しき朝日かな
小春日や城址の松の深みどり
きらきらと浅間の星や冬に入る

露新しき

心持ち明るき朝に帰り花
嘸むほどに玄米旨し冬ぬくし
冬うらら大豆炒る音かんばしき
みほとりに亡き母いまし親鸞忌
ほつこりと一椀ぬくし根深汁
冬鴟の鳴き声やまぬ夕まぐれ
足早に雲過ぎゆきて木の葉散る

帰り花

底抜けに明るい空よ鶴が鳴く
我が弾けば子等は囲みてどんぐりの歌
一本で括られ新藁匂い立つ
野辺送り我をばなれず秋の蝶
ゼツケンを霧に濡らしてゴールイン
山茶花や傘弾ませて子が来るよ
初冬の月円かななるエアポート

エアポート

牡蠣打ちの小屋の屋根にも朝日さし
山水も紅葉浮かべて急流に
暮れ初め鹿の鳴き声宮島に
雨にぬれた桜紅葉の艶やかさ
冬めいた海が臨める山歩き
牡蠣船の灯揺れて日が暮れる
鼻の鳴く帰り道月明かり

牡蠣打ち

渚なみ冬の影なき石の馬
木枯や子らの影なき石の馬
水鳥の小さき青空日を零す
海鳴りのきこゆる街に雪便り
硝子越しバスを待つ間のシクラメン
祝婚の花火大輪冬の河
冬の雨端切れつないでお手玉に

水鳥

停まる度車両に満る山の冷え
伊吹山従う嶺に雲を生み
柿の実のたわわに実る城の跡
水鳥の飛び立つ先は日本晴れ
空と海溶け合う蒼に竹生島
泥付きの人参葉ごと届けらる
小春日や窓拭きあげて陽を招く

水鳥

子どもの俳句

冬晴れて長浜城が建っている 大阪 小六 高橋 成哉
琵琶湖の水冬の空色反射する 兵庫 小五 祝 桃果
冬の日も汗を流すと気持ちいい
秋になり赤にぬられた紅葉達
又又虫の音楽会は草むらで
ばあちゃん家こたつにさっそくもぐりこむ 大阪 小四 高橋 博己
びわこにはかもの兄弟いっぱいだ 大阪 小三 祝 龍之介
秋の山きりてちょうど上見えないな
秋の風電車の窓から入ってくる 兵庫 小三 祝 龍之介
カマキリの大きなタマゴかたいのか 大阪 小一 高橋 周也
コロギの歌の合唱いい歌だ
かみがいたびわこにさがはえていた
とつきゅうを山でしゃんとつたのしいな
きのさきでみんなでおんせんよかつたな 千葉 小一 伊藤美緒奈
ぬかをみるとくずもちがたべたくなる
かぜがないからさむくないあさ
あきのものをみつけてバタバタはらう 千葉 幼年 後藤 凜
はっぱのトンネルどんぐりがいっぱい
つぼみのついたきくはおかあさんにおみやげ
メロンをかじってしてるはてどうける

選後に

高橋正子

山茶花の長き季節の始まりぬ
抒情が削ぎ落とされ、大変シンプルで一筋通った句である。
山茶花は早いものは、十月ごろから咲く。本格的に咲き始めるのは、立冬を過ぎてからであろうが、冬の間の「長き季節」を咲き続ける。今その咲き始めのとき、花あって身辺楽しい季節が過ごせるであろう。

快晴が包みし冬の奥琵琶湖

広い琵琶湖の奥である湖北は、その日快晴であった。時雨の多い湖北が快晴に包まれることは希かもしれない。「奥」という捉え方と、「包む」という表現がよく呼応して、湖北の感じがよく出ている。

雪吊の天の青さに絞られる

表現に無駄がなくイメージが鮮明である。琵琶湖畔の長浜豊公園の松にかけられた雪吊。雪吊の縄が青空の中に、先端で括り絞られている。「天の青さ」が、堂々として、雪吊の凜とした様子がよく見える。

冬晴れて視線を高く天守へと

大阪城の吟行での作。大阪城は、巨大な石垣とそびえる天守に目が注がれる。足元よりも、視線は冬晴れの空へ、天守へと自然に向けられる。いわゆる切れのない「一句一章」の句のよさがあって、すっきりと、素直な感覚でよくまとめられている。

まつすぐに道路明るき夜学の灯

洋子
秀之

俳句の風景（十一）

① 祝 恵子

冬の晴れ近江の浜に居る不思議
それぞれの子らに賞状冬紅葉

長浜駅に着くまでに車窓より冠雪した伊吹山でしょうか大きく通り、冬の国に来たつと感じました。長浜城には雪つりが張られ流石に雪国なのですね。いいお天気となり間近に琵琶湖を見、鴨が波間に揺れ、空は青く、霧が晴れだし、竹生島や舟が姿を現し見とれてしまいました。翌日は大阪城吟行と授賞式や高橋信之先生の記念講演、記念句会など有意義な二日間でした。孫二人には子供俳句賞を、私は第一回インターネット俳句センター賞をいただきありがとうございます。高橋信之先生、正子先生、ご参加の皆様お世話になりました。ありがとうございました。いただきました子供の賞状は額に入れて渡してやろうかと思っております。

② 多田有花

快晴が包みし冬の奥琵琶湖

広い琵琶湖の奥である湖北は、その日快晴であった。時雨の多い湖北が快晴に包まれることは希かもしれない。「奥」という捉え方と、「包む」という表現がよく呼応して、湖北の感じがよく出ている。

別れてのち冬の夕陽を見て帰る

大阪の花冠フェスの帰りであろうか。さり気無い冬の景がいい。さり気無い「別れ」に俳句の抒情がある。

先日の大阪の俳句フェスティバルが終わり、JRに乗ったら夕陽がずっと見えました。

(多田有花)

まつすぐに道路に沿いゆくと、夜間学校の灯があかあかと道を照らしている。その灯に寄り添うように、また励ますように歩く作者の姿が見え、あたたかい句である。

木の実降るそのひと時に出会いけり

木の実が降るのに出会うことは、だれにでもあるだろう。それを「そのひと時に出会いけり」と、「その時」を切り取ったのが鋭い。降る木の実との一期一会の思いが強い。

水鳥の来て多摩川の和らぎぬ

多摩川はまずみさんにとって、日常の身近な川。そこに水鳥がやってきて川に生き生きとして、和やかな表情が生まれる。楽しい冬の川である。

花八手みな咲きぎりし裏庭を

立冬からはやひと月近く経つと、八手の花はどれも咲き切ってしまう。何かの用事で裏庭に出て、気付いたことである。いよいよ歳末の感が強まる。

さらさらと浅間の星や冬に入る

「浅間」が効いている。冬に入って浅間の夜空がきりつと澄むと、星が神秘的なまでにきらめく。山国の羨しい星空である。

作品を揚げ行く冬の車椅子

「作品」がいい。一つの作品となった画か、書、それを自分で車椅子の膝に載せて、搬入しようとしている。作品は自分自身ともいえる。作品はそうでありたい。

底抜けに明るい空よ鴨が鳴く

「底抜けに明るい」とそこまで言ってしまう心境。抑えたものをふっ切る気持ちがそう言わせるのだろう。青空に筒抜ける鴨の声に気持ちちが託されている。

③ 藤田洋子

冬晴れて視線を高く天守へと

大阪城は、巨大な石垣とそびえる天守に目が注がれる。足元よりも、視線は冬晴れの空へ、天守へと自然に向けられる。いわゆる切れのない「一句一章」の句のよさがあって、すっきりと、素直な感覚でよくまとめられている。

日常の生活に戻れた朝の用意に、楽しかった旅も過ぎ去った。「旅の一日」がすてきな言葉だと思えます。

おかげさまで、ご参加の皆様とともに、とても楽しい時間を過ごし、句会ではお一人お一人の俳句を鑑賞しながら学ばせていただきました。あらためて十五年の歳月を思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

④ 佃 康水

比良晴れて鴨の琵琶湖の蒼深し

この日はインターネット俳句センターの開設十五周年目と言う格別の日でも有り感慨も一入でございます。この句会のためのご準備にどれだけのお手数をお掛けしたことかとおよび感謝の念で一杯でございます。吟行句会は初めての体験でございますが、同じ風景を見ての句会には皆さんの視点やその表現の素晴らしさに多くの事を学ばせていただきました。先生方の講演や講評の中で「心は言葉に表せない。だからこそ正確な言葉を使わなければならない」、「俳句は楽しまなければ」と言うお言葉、そして節々での厳しいお言葉は私達への愛の鞭の何のもでもないと、これからも心して作句に精進して参りたいと思えます。先生方の記念の素敵なお扇子、色紙は終生宝として大切にさせていただきます。有り難うございました。この度は両日とも晴天に恵まれ、本当に充実した楽しい吟行句会でした。

(佃康水)